



抽選会

深川医師会
深川市立病院

代田 剛

講堂には20脚ほどの集会用の長い机が2列に並べられていた。机にはパイプ椅子も用意され、数名がパラパラとあちこちに座り、開会を待っていた。やがて6名の職員が入場し、参加者に向かい合う形で座った。所長の挨拶のあと、目的の抽選会となった。厳冬ではあるが、幾分日が長くなった2月末のある日のことである。市の区画農園を希望する市民に1シーズン貸し出すための抽選会である。その農園は私の家からそう遠くなく、散歩で訪れたことがある。たくさんの花も植えられて、公園の雰囲気もある。

申込者多数の場合、当落を決める抽選会を公開で行うと、前もって公報で知らされていた。実を言えばここ数年、貸し付け希望の申し込みの往復葉書を毎年出し続けていたが、返信の葉書はいつも“残念ながら云々”で始まる落選の通知であった。散歩で見た区画農園数はかなりの数があり、こんなに落選が続くということがあるのだろうか、と素朴な疑問が湧いた。それならば一体どんな風に抽選がなされているのであろうかと思い、抽選会に参加したのである。さらに、抽選の現場を見れば、次年度からの当選を得るための糸口をつかめるかもしれないし、あるいは参加することにより優遇され選ばれることもあるかもしれないなどと虫の良い期待を持って参加した。

さて、話を抽選会に戻そう。集められた葉書は一辺が約80cmの1面だけが中の見える透明な面を持った立方体の中に納められていた。上部に丸い穴が空けられ、係がそこから腕を入れて葉書を1枚ずつ抜きだして、順番に当選者とするのである。透明の面を参加者に向けた状態で、白い手袋を付けたただ一人の女性職員が抜き出し、それを隣に控えている男性職員が居住区域と氏名を読み上げるのである。手順として、一般参加者の目前で抽選をしているので、公正に抽選していると市は表明しているのである。見ている私は、不正を試みることはできないことはないが、それはミステリーの世界である、と思った。じゃんけんなら多少の自信はあるが、くじでは私の力は全く及ばない。選ばれなかったら今年もまた諦めるしかないと覚悟を決めた。当選者の読み上げを聞くことにより、遠くからもたくさんの人が申し込んでいるのを初めて知った。だから倍率も大学受験並み(?)の2.76倍もあると納得した。昨年

までの倍率は不明であるが、今年とそう大きく変わっていないと仮定すると、確率的には、私にこれまでは不運が何倍にもなっておそいかかったといえるであろう。抽選は滞りなく進んでいった。今年も女神に引き当てられず、不運の確率をさらに高めることになるだろうな、と諦めかけた時に、名前が読み上げられた。緊張が取れ、疲れがドッと出たように感じられた。ともあれ今年の抽選会は終了した。振り返って、抽選会に参加しようがしまいが、結果は変わらなかったであろうが、内容が分かった点で参加した意味はあった。結果をご褒美と考えよう。努力は報われると単純に思った方が人生は幸せである。

4月のある日、朝のテレビを見ていた時のことである。昨年まで日本ハムファイターズのコーチで、今年4月からSTVのコメンテーターとなった白井一幸さんの話である。女性キャスターから「今年度から何か新しいことにチャレンジしていますか」と尋ねられた。「盤溪で野菜作りをしています」と答えていた。華やかさを持ったこういう人も貸し出し農園を借りて家庭菜園をしているのを知り、意外な感じと仲間意識をちょっと感じた。私の頭の中では、家庭菜園は地味である。その地味の中にいくつも良い点があると思っている。その一つに認知症予防がある。野菜作り、特に小規模多品目を作る家庭菜園では、高度の実行機能が要求される。この点を最近患者さんに特に強調している。私にも当てはまるが…。



区画農園の一例

一区画の中に種々の野菜の苗が育ち中である。
下方の紐が貸与された隣の農園との境。